鬼は何を見て何を思い何を望むのだろうか

白咲

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世が鬼だった少年の話

あの鬼は誰なんだろうか何故俺は忘れているだろうか

オリ主基本空気で進んでいきます。

陰陽師（ゲーム）とヒロアカのクロスオーバー作品です。

目次

24話	67
23話	64
22話	62
21話	59
20話	57
19話	54
18話	52
17話	49
16話	46
15話	43
14話	40
13話	37
12話	35
11話	32
10話	29
9話	26
8話	22
7話	19
6話	16
5話	13
4話	10
3話	8
2話	5
1話	1

1話

あっち、こっちに人や妖怪の死体、火が燃え広がっている
中心に鬼と人間
あの鬼は誰だろうか、否
俺はあの鬼を知っている
そうあの鬼は俺の大切な……

誰かの大切な誰か

「おい…に…る、おい…き」
五月蝿い
俺は声のする方に拳を突き出す。
何かに当たった感覚を覚える。
俺はゆっくりと目を開ける。
目を開けると金色の髪の男が額を抑えていた。
「ッッ」
誰だったか
「いっってーなぁこの馬鹿弟」
まだ横になってる俺の額に拳を振り落とす。
嗚呼思い出した兄の雷(いかずち)だ。
「痛いなぁ、何も殴ることないだろ」
俺は体を起こしながら言う。
「うるせえ先に殴ったのはお前だろうが。ってか痛がりながらその言葉を言え」
「確かにそうだな、悪い」
「ーーっくっそ」

雷は自分の髪をかき苛立たしそうに扉の前に行きドアノブに手をかけ
「朝食できてるからな」
とこちらに顔を向けずに言う扉をを開け強く閉めた。
少しすると雷が注意されている声が聞こえた。
俺もいかないと
俺はベットから出てタンスを開け制服に手をかけ着替え始める。
そういえば雷は何に怒ってたんだろうか、謝り方が悪かったのだろうか。この世に生を受けてもうすぐ15年経つが今だに家族との関わり方がよく分からない。
そんなことを思いながら着替え終える。
部屋を出てリビングへ向かう。
「おはよう、鬼丸」
声をかけられたキッチンの方へ顔を向けると曙(あけぼの)色の髪をした男が笑っていた。
「…おはよう」
誰だったか
「暁(あかつき)月兄さん鬼丸分かってないみたいだよ」
暁月…嗚呼一番上の兄か
「え、そうなのか」
暁月は困惑したような顔をした。
「今は分かるよ」
「そ、そうか。よかった。今お前の分を出すな」
「俺は分かる?」
何か含みのある笑みを浮かべた薄紫色の髪をした青年が聞いてきた。
沈黙が続く
「雷電(らいでん)鬼丸で遊ぶな」
雷電…三番目の兄か
「怒りは収まったの雷兄さん?」
どこかの学校の制服を着た雷が来た。

「嗚呼」
答えると雷電の右隣に座り朝食の目玉焼きがのったトーストに手を伸ばす。
「おい雷全員座ってからだ。鬼丸は雷電の前の席な」
俺はその言葉に頷き言われた席に座る。
暁月は自分の前と俺の前にトーストを置く。
「よしそれじゃ」
皆手を合わせる。
「いただきます」
「いただきます」「いただきます」「…いただきます」

半分くらい食べたぐらいに
「母さんからの伝言な」
「伝言？」
「そう、今度家に付き合ってる相手を連れてくるって」
「まじかよ」
「いつって言ってたの？」
「相手が休みの時と俺の休みが重なった時だってさ」
「ふーんじゃまだ先だね。安心した」
「お前らその時ちゃんと家にいろよ」
「へいへい」
雷が少し不機嫌そうに答える。
「ご馳走さま」
雷と雷電が同じタイミングで席を立つ。
「お、もうそんな時間か」
暁月も手に持っていた一口くらいのトーストを口に入れコーヒーを飲んだ。
「ごちそうさまでした」
と言うと流しに皿をとカップを置く。
「ごちそうさま…でした」
俺もそう言い皿を持っていく。

暁月は俺の分もせっせと洗う。
俺は自分の部屋に鞄を取り行き玄関へ行く。
すでに玄関には雷、雷電がいた。
すぐにスーツを着た暁月が来てドアノブに手をかけ
「「「いってきます」」」
と言い出る。

2話

学校に着くと下駄箱へ向かう。
紙くずが入っているところから上靴をとり上靴の中にいくつか入っている紙くずをとる。
自分の教室へ向かう。
花瓶が置かれている机を見つけ、その教室に入る。
花瓶が置かれている机の席に座る。
周りからクスクスと笑う声が聞こえてくる。
数分するとチャイムが鳴り男の人が教室に入ってくる。
俺の机の上を見て一瞬めんどくさそうな顔になる。
「おい誰だ机の上に花瓶を置いたのは」
誰も何も答えない。
「まぁいいが。何となく察しているやつもいると思うが、将来を考えていく時期だ。なので進路希望のプリントを配るが」
少し間を空けて
「全員ヒーロー科志望だよな」
「もちろんですよ先生」
ヒーローか……

今日は少し遠回りをして帰る。
何かあるような気がする。
しばらく歩くと何か騒ぎになっている場所につく。
ヘドロ敵(ヴィラン)が人質をとっていて敵に有利な個性を持たないヒーロー達は手を出せないようだ。
人質になっている少年が抵抗している。爆破?の個性のようだ。
すると少年が飛び出していく。
背負っているリュックを敵に投げると中身が出て敵に当たる。
拘束が緩んだように見える。敵が少年に攻撃しようとする。他のヒーロー達が助けに行こうとすると筋肉質な男が攻撃を防いだ。
野次馬達が「オールマイトだ!」と興奮している。

オールマイト…
「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!!!」
敵に攻撃を当てる。衝撃波がすごい。
そして天気が雨へと変わる。
「右手一本で天気が変わっちまった!」
「すげぇえ!これがオールマイト!」
このあと散った敵はヒーロー達に回収された。
飛び出した少年は怒られている。反対に人質になっていた少年は怒られているようには見えなかった。
「…ただいま」
「おかえり鬼丸」
家に帰ると暁月が玄関にいた。
「遅かったな」
遅かっただろうか。
「何かあったのか?」
何にがあったか
「鬼丸」
暁月が俺の頭に触ろうとしてくる。
俺は顔が強張るように感じる。
触れそうになった瞬間
「暁月兄さん、鍋沸いてたよ」
雷電が声かける。
「そうか分かった。ありがとう雷電」
暁月は雷電に礼を言いリビングへ向かった。
「大丈夫?」
「…嗚呼、ありがとう」
俺は雷電に礼を言い部屋へと向かった。
夕食後風呂へ入り歯を磨き自分の部屋へと向かう。
部屋に着き机の引き出しから日記を取り出し夢の内容と帰る時にあった内容を書く。書き終わるとベッドに入って目を閉じる。
朝目を開けベッドから出る。

机の上に進路希望の紙が置いてあり既に記入されていた。
第一希望雄英高校と
コンコンコン「起きてるか鬼丸」
この声は暁月？
「起きてるよ」
扉が開き、暁月がいる。
「おはよう鬼丸。朝ご飯出来てるぞ」
「おはよう」
「どうかしたのか？」
「…何も」
「そうか、早く来いよ」
と言い部屋を出ていった。
暁月を前にすると何も考えられなくなる。だから俺は暁月が苦手だ。

3話

俺は庭園に立っている
どこからか笛の音色が聞こえてくる
嗚呼いい音色だ
聞こえてくる方へと足を運ぶ
刀を帯刀して弓を背負って縁側で笛を吹いている青年を見つける
彼は……

雄英高校の門をくぐる。
周りを見ると俺以外にも沢山の受験生がいる。
緑色の癖毛の髪の少年がこけそうなのを少女が個性を使って助けていた。
あの少年どこがで見たことがあるような気がした。
だけど覚えてないので気にすることなく受験会場の方へと向かう。
席に着いて暫くするとプロヒーローによって受験の説明が行われた。
「受験生のリスナー！今日は俺のライブにようこそ！実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ！Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ!?」
誰も何も返さないので空間がシーンとした。
「この後１０分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ！持ち込みは自由、プレゼン後は各自指定の演習会場へ向かってくれよな」
俺が向かう会場はここか
「演習場には仮想ヴィランを3種多数配置してありそれぞれの攻略難易度に応じてポイントを設けてある。仮想ヴィランを行動不能にしポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ。他人への攻撃などアンチヒーローな行為はご法度だぜ」
説明し終わると
「質問よろしいでしょうか」
そう言った少年にスポットライトが当たる。

「オーケー」
　プロヒーローが応える。
「プリントには４種のヴィランが記載されております。誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態！我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めこの場に座しているのです！」
「ついでにそこの縮れ毛の君！先ほどからボソボソと気が散る！物見遊山のつもりなら即刻雄英から去りたまえ！」
　誰かが注意されていた。
「受験番号７１１１君ナイスなお便りサンキューな。４種目のヴィランは０ポイント！そいつはいわばお邪魔虫」
「各会場に１体、所狭しと大暴れしているギミックよ。倒せないことはないが倒しても意味はない。リスナーにはうまく避けることをお薦めするぜ」
　ふむ０ポイントの敵か、どんな敵なんだろうか、強いだろうか、なんだ心の底がうずうずするな。あーなんなんだろうこの心が躍る感じは初めての感覚だなあ
「俺からは以上だ。最後にリスナーへ我が校校訓をプレゼントしよう。」
『かの英雄ナポレオン・ボナパルトは言った。真の英雄とは人生の不幸を乗り越えてゆく者と更に向こうへ！ＰｌｕｓＵｌｔｒａ！』
　ＰｌｕｓＵｌｔｒａ、もっと先へか
　受験生達は各演習会場へと向かう。

4話

試験会場に着く。
しばらくすると、「はい、スタート！」と開始の合図が聞こえた。
受験生達が一斉に飛び出す。
敵を見つける。
「標的発見。ブッコロス」
「やれるものならやってみろ」
俺は居合の型をとり左手に刀を出す。右手で柄を掴み敵に近づいて鞘から引き敵を横一文字に切る。
敵は真っ二つに切れ上の部分が地面に崩れ落ちた。
背後に気配を感じ、個性を使う。背後を向く。赤い糸が絡まって動くことができない敵がいた。俺は刀を敵の真上から振り下ろす。敵は真っ二つに切れ崩れ落ちた。
この辺りには敵はいないみたいだなあ。
敵が多い所はどこだろうか、空に上がって見渡してみるか。
俺は背中から黒い羽を広げ飛び立つ。
空からだとどこに敵がいるのかが把握しやすいな。
敵を見つける。俺は弓と矢を出し構え、そしてその矢を敵に向かって放った。その矢は敵の頭部を射抜いた。辺りを見回し三体の敵を見つける。三本の矢を出しその矢を三体の敵に向かって放つ。三本の矢は三本とも敵の頭部を射抜いた。見つけた敵を射抜いていく。
周りの建物よりも大きい敵を見つける。
あいつが0ポイントの敵！
また心が躍る感じがしている。騒動音がさっきより大きい感じる。此方側に向かってきているようだった。
俺は敵の側へと向かう。近くの建物に降りる。敵を赤い糸で身動きがとれないように絡ませる。敵の動きが止まる。
刀で切るか、いや炎で燃やしてみるか。
俺は朱殷(しゅあん)色の羽織を着て頭に二本の角を出した姿になる。両手が鬼のような手になる。

「獄炎」
敵から炎が出て敵が燃えていく。しばらくすると炭となり崩れていった。
「試験終了ー！」
試験終了の合図が聞こえた。
試験会場を離れ、筆記試験を受ける。受け終わると帰路につく。

試験からしばらく日が経って雄英高校から家に合格通知が届いた。
俺は部屋から出て、リビングへと向かう。リビングには暁月がいた。
「どうだったんだ鬼丸？」
「合格」
「やったな鬼丸」
暁月が微笑む。暁月は俺の頭へと手を伸ばす。俺は顔が強張る。
暁月は俺の頭を撫でた。
「鬼丸、やっぱりお前はあの２人とは違うだなあ」
あの２人って雷と雷電のことか？
「なぁ鬼丸お前は」
バチッ
「イッ」
身体中に電気が走り俺は暁月から離れる。
「雷電か」
暁月が顔を左に向ける。俺もつられて向ける。向けた方には雷、雷電が立っていた。
「鬼丸に何しようとしてんだ」雷が言う。
「チッ」
暁月は舌打ちをした。暁月はキッチンへと向かう。それを見て雷電は俺の側やってくる。
「ごめん、大丈夫か」
「嗚呼」
雷も側にやってくる。俺の頭を撫でた。

「悪かったな。…もう暁月の奴と2人っきりになるなよ」
と言うと自分の部屋へと向かった。雷電も微笑みながら俺の頭を撫でると自分の部屋へと向かった。

5話

桜の木が立ち並んでいる
俺はある場所へと歩んで行く。
暫くすると桜の木の下で酒を酌み交わしている鬼二人がいる
暫くすると二人は俺に気づく
そして俺の名前を呼ぶ
＊＊＊＊と……

雄英高校の門をくぐり教室へと向かう。廊下を歩いていると教室の場所が分からなくなった。前を歩いている黒い生徒に声をかける。
「少し、いいか」
声をかけるとその生徒は振り返ってくれた。鋭い目つきに赤い瞳の黒い鳥のような顔の風貌をした少年だった。
「1年A組の教室が何処なのか教えてくれないか」
そう聞くとその少年は一瞬訝しげな顔したが、
「嗚呼、構わない。俺の行く目的の場所も同じだからな」
「すまない」
並んで歩き出す。歩いている時に軽く自己紹介をした。少年の名前は常闇踏影という名前だった。俺と同じ試験会場だったそうだが俺には覚えがなかったので試験集中していて覚えてないと返した。常闇は
気分を害したような素振りはなくそうかと言った。その様子を見て俺は雷電に言われた通りに出来たのだと胸を撫で下ろした。暫く歩いていると1—Aと描かれた中々大きい扉の教室に着く。既に教室には何人か生徒がいた。挨拶することなく席に着き鞄から暁月に渡されたノートと箱を出し箱を開ける。箱の中には鉱物が入っていた。鉱物の近くには鉱物の名前が書いてある。ノートを開くと中には色々な武器の写真と武器の事細かな説明が書いてあった。鉱物の説明も書いてある。
担任の先生が来るまで読んだり鉱物を触ったりしていると何か気

配を感じた。顔を上げると生徒としかいなかった。なら何処だろうと探すと彼らの足元に寝袋に入った無精髭の男だった。
「お友達ごっこしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ」
ゼリー飲料を飲み干しながらそう告げる男は、寝袋から出ながらゆらりと立ち上がった。長い髪はボサボサで、首に包帯のようなものを巻きつけている。
「静かになるのに8秒もかかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね」
「担任の相澤消太だ。よろしくね」
言うと相澤先生は学校指定のジャージを着てグラウンドへ来いと生徒全員に告げる。入学式やガイダンス無しに個性把握テストをするそうだ。
「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ。雄英は自由な校風が売り文句、そしてそれは先生側もまたしかり。お前たちも中学の頃からやってるだろ？個性使用禁止の体力テスト。国はいまだ画一的な記録を取って平均を作り続けている。合理的じゃない。ま…文部科学省の怠慢だな」
「実技入試成績のトップは爆豪だったな。中学のときソフトボール投げ何メートルだった？」
「６７ｍ」
「じゃあ個性を使ってやってみろ。思い切りな」
爆豪と呼ばれた少年は腕の準備運動をする。
「死ねえええええええ！」
と言い投げた。ボールは爆風に乗って飛んだ。
「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」
と言い記録を見せてきた。
「何これ面白そう！」
「個性思いっきり使えんだ。さすがヒーロー科！」
見た生徒が言う。
「面白そう…か。ヒーローになるための3年間そんな腹積もりで過ご

す気でいるのかい？」
「よし、８種目トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し除籍処分としよう」
へー
「生徒の如何は俺たちの自由。ようこそ　これが雄英高校ヒーロー科だ」
相澤先生が髪を上げて言った。
「これから３年間雄英は全力で君達に苦難を与え続ける。更に向こうへ…ＰｌｕｓＵｌｔｒａさ」

6話

最初の種目は５０ｍ走
「位置ニツイテヨーイ」バンッ
俺はヒエドリの姿になり飛んだ
「3．６０秒」
眼鏡をかけた少年の記録を越せなかった。
次の種目は握力
俺は鬼の姿になり握力計を握る。
バギッ
と嫌な音がし握力計が壊れた。
その次の種目は立ち幅跳び
羽を出す。跳ぶのと同時に羽を広げる。グラウンド一周して元の場所に帰ってくる。相澤先生から「何時間維持出来るんだ」と聞かれた。「体力を使わないので、何時間でも飛んでられると思います」
と言うと相澤先生は手元の液晶に何かを入力する。それを見せる。そこには無限（？）と書かれていた。
その次の種目は反復横跳び
個性は使わなかった。５５回
次の種目はハンドボール投げ
茶髪の少女が無限を出していた。
どうやったボールを飛ばそうか、大砲で飛ばしてみるか
俺は円の中に入る円の中で大砲を出しボールを撃ち出す。
６ｋｍ飛んだ。
最大射程距離６ｋｍのガルバリン砲で最大距離を飛んだ。もっと飛ばすには最大射程距離がガルバリン砲より長い大砲でなければいけないがパリ砲は重く大きいから円から出る。カノン砲を思い出す。カノン砲を出しボールを撃ち出す。
１２ｋｍ飛んだ。
１球目の距離２倍か、もっと遠くに飛ぶと思ったんだがな
「４６ｍ」

緑色の縮毛の少年だった。相澤先生に何か言われているようだった。
そしてその少年は二球目を投げた。大きな炸裂音と共にボールが飛んでいった。
見ると少年の指が痛々しかった。相澤先生に向かって痛々しい指の手を握り笑ったような顔で何かを言っっていた。
「どういうことだ！訳を言えデクてめェ！」
爆豪と呼ばれていた少年が彼に飛びかかったが相澤先生が首に巻いている布に抑えられる。
「俺はドライアイなんだ」
「時間がもったいない。次準備しろ」
そう言い相澤先生は布を自身の首に戻した。
黒髪ポニーテールの少女が俺と同じように大砲を作りボールを撃ち出していた。彼女の方が遠くに飛んでいた。
物を創る個性か、物を創り出す仕組みが俺とは違う個性だな
次の種目は上体起こし
個性を使わなかった。３３回
黒髪ポニーテールの少女はバネを肘と背中に創り出していた。
身体に付けた状態でやればよかったのか
次の種目は長座体前屈
体の筋肉を柔らかくする。７７ｃｍ
「んじゃパパッと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ」
俺は2位か
「ちなみに除籍はウソな。君らの個性を最大限引き出す合理的虚偽」
嘘か、そんな感じなかったんだがな
「あんなの嘘に決まってるじゃない。ちょっと考えれば分かりますわ」
と黒髪ポニーテールの少女が言う。
「これにて終わりだ。教室にカリキュラムなどの書類あるから目ぇ通しとけ」

と言うと相澤先生はグラウンドを出ていく。

7話

白装束を着、白布を頭にかけ、市女笠をもった＊＊＊＊
側で同じ様な姿をしている俺
暫く立っていると＊＊＊＊の頭を持った人間達がやってくる
焦ってはいけない、時を見計らわなければならない
＊＊＊＊が刀を抜き襲ってくる
＊＊＊＊の腕が切り落とされる
あ、あ、あ ？あ ？あ ？あ ？ーー

「鬼丸！」
名前を呼ばれ目を開けると心配そうな顔をしている三人がいた。
何かが焼き焦げた臭いがした。辺りを見回すと部屋の所々が焦げていて天井にいる物体が少しずつ小さくなっていた。
「大丈夫か鬼丸」
薄紫色の髪の青年が声をかけてきた。
「…嗚呼」
「起きる時間じゃない、まだ寝ておけ」
金色の髪の青年は言う。
「部屋のことは気にしなくていいから眠ればいい」
曙色の髪の青年にそう言われ頭を撫でられる。する眠気がやってきた。
「眠たくなってきただろ？そのまま身を任せればいい」
俺はそう言われるまま目を閉じた。
朝起きると焦げた跡はなかった。
午前は必修科目、普通の授業受ける。午後はヒーロー基礎学。
「私が～～普通にドアから来た～！」
「おお～！」
「すげぇや！本当に先生やってるんだな！」
「あれシルバーエイジのコスチュームね」
「画風違い過ぎて鳥肌が…」

「私の担当はヒーロー基礎学。ヒーローの素地を作るためさまざまな訓練を行う科目だ」
「早速だが今日はこれ！戦闘訓練！」
先生はＢＡＴＴＬＥと書かれた紙を出す。
「そして入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム！着替えたらグラウンドβに集まるんだ！」
先生が手に持ったリモコンを操作すると、教室の床から棚が現れた。
雄英高校入学前に個性届、身体情報、デザイン等の要望を提出すると、学校専属の会社が最新鋭の戦闘服を用意してくれるそうだ。
「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女。自覚するのだ。今日から自分はヒーローなんだと！」
「さあ始めようか有精卵ども！」
「君らにはこれからヴィラン組とヒーロー組に分かれて２対２の屋内戦を行ってもらう」
「基礎訓練なしに？」
「その基礎を知るための実践さ」
「ただし今度はぶっ壊せばＯＫなロボじゃないのがミソだ」
「勝敗のシステムはどうなります？」
「ぶっ飛ばしてもいいんすか？」
「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか？」
「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか？」
「このマントやばくない？」
「んんん聖徳太子～！」
「状況設定はヴィランがアジトのどこかに核兵器を隠していてヒーローはそれを処理しようとしている。ヒーローは時間内にヴィランを捕まえるか核兵器を回収すること。ヴィランは制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえること！」
「コンビおよび対戦相手はくじだ！」
２１人で一人多いから一つのチームだけ三人になるのか
俺は尾白と言う少年と組む。相手は左右の目と髪色が違う少年と

口元をマスクで隠す銀色の髪の少年二人とだった。

８話

最初は緑色の縮毛の少年と茶色の髪の少女対薄い金色の髪の少年と真面目そうだった少年だった。
「それではＡコンビ対Ｄコンビによる屋内対人戦闘訓練スタート！」
開始されすぐに薄い金髪の少年が緑髪の少年と茶髪の少女に奇襲を仕掛ける。それに気づいた少年は少女を避けるため倒す。
「爆豪ずっけぇ！奇襲なんて男らしくねぇ！」
「奇襲も戦略。彼らは今実戦の最中だぜ」
「緑君よく避けれたな！」
「爆豪が行った！」
爆豪と呼ばれる少年が突っ込むが緑髪の少年に右腕を捕まえられる。そして投げ倒す。爆豪は立ち上がり、緑髪の少年は爆豪に構えの型をとる。
「爆豪のヤツ何話してんだ？」
「小型無線でコンビと話してたのさ」
「持ち物はプラス建物の見取り図そしてこの確保テープ。これを相手に巻きつけた時点で捕らえた証明となる」
「制限時間は１５分で核の場所はヒーローに知らされないんですよね？」
「ヒーロー側が圧倒的に不利ですねこれ」
「ピンチを覆していくのがヒーローさ。それに相澤先生にも言われたろう？」
「せーの！」
『ＰｌｕｓＵｌｔｒａ！』
「ムッシュ、爆豪が」
爆豪が緑髪の少年に蹴りを入れ緑髪の少年が腕で受け止める。その脚に確保テープを巻きつける。爆豪が右手を爆破させながら緑髪の少年に攻撃しようとするがそれを避ける。
「すげぇなあいつ！」
「個性も使わずに入試１位と渡り合ってる！」

「なんかすっげぇイラついてる。こわっ！」
緑髪の少年は爆豪から離れる。
茶髪の少女は真面目そうな少年に見つかる。
爆豪は手のひらを緑髪の少年に向け何かを仕掛けようとする。
「爆豪少年ストップだ！殺す気か!?」
何かが放出された。建物の壁に穴が空いた。
「先生止めた方がいいって！爆豪あいつ相当クレイジーだぜ。殺しちまうぜ！」
「いや…」
先生は少し考えている様子だった。
「爆豪少年。次それ撃ったら強制終了で君らの負けとする」
「あぁ!?」
「屋内戦において大規模な攻撃は守るべき牙城の損壊を招く。ヒーローとしてはもちろんヴィランとしても愚策だそれは。大幅減点だからな」
爆豪は緑髪の少年へ突っ込み緑髪の少年の前で爆破、緑髪の少年がが反撃しようとしたのを回避し爆破した。
「考えるタイプには見えねぇが意外と繊細だな」
「どういうことだ？」
「目くらましを兼ねた爆破で軌道変更。そして即座にもう一回」
「慣性を殺しつつ有効打を加えるには左右の爆破力を微調整しなきゃなりませんしね」
「才能マンだ才能マン。やだやだ」
爆豪は緑髪の少年の腕を攻撃しその腕を掴み地面に打ち付けた。
「リンチだよこれ！テープ巻きつければ捕らえたことになるのに！」
「ヒーローの所業にあらず」
「戦闘能力において爆豪は間違いなくセンスの塊だぜ」
二人は何かを言い合っている。そして、二人は個性を発動させ相手に向かって突っ込む。
「やばそうだってこれ！先生！」
「双方中止ー」

緑髪の少年が茶髪の少女に何かを言ったのか少女は近くの柱に掴まる。
ぶつかり合う間近に緑髪の少年は右腕を天井に向かって打った。放たれた部分が天井を突き破り茶髪の少女がいる階までいき、少女は個性を使い核を回収した。
「ヒーローチーム…ＷＩ～Ｎ!!!」
「負けた方がほぼ無傷で勝った方が倒れてら…」
緑髪の少年は担架に乗せられ運ばれいく。茶髪の少女は吐いていた。
「勝負に負けて試合に勝ったというところか」
「訓練だけど」
「勝ったにせよ負けたにせよ、振り返ってこそ経験ってのは生きるんだ。つっても今戦のベストは飯田少年だけどな」
「なっ!?」
飯田と呼ばれた少年は驚く。
「勝ったお茶子ちゃんか緑谷ちゃんじゃないの？」
蛙のような見た目の少女聞く。
「なぜだろうなぁ。分かる人！」
「はいオールマイト先生。それは飯田さんが一番状況設定に順応していたからです」
黒髪ポニーテールの少女が手を上げ言う。
「爆豪さんの行動は戦闘を見た限り私怨丸出しの独断。そして先ほど先生がおっしゃっていた通り屋内での大規模攻撃は愚策。緑谷さんも同様、受けたダメージから鑑みてもあの作戦は無謀としか言いようがありませんわ。麗日さんは中盤の気の緩み。そして最後の攻撃が乱暴すぎたこと、ハリボテを核として扱っていたらあんな危険な行為はできませんわ。相手への対策をこなし核の争奪をきちんと想定していたからこそ飯田さんは最後対応に遅れた。ヒーローチームの勝ちは訓練だという甘えから生じた反則のようなものですわ」
「ま…まぁ飯田少年もまだ固すぎる節はあったりするわけだが…まあ正解だよ。くぅ～！」

「常に下学上達、一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんので」
「よ～し、場所を変えて第２戦を始めよう！」

9話

第2回戦

「えっと、よろしく？」

尾白は困惑した様子で言った。

「…よろしく」

「それではBコンビ対Iコンビによる屋内対人戦闘訓練スタート！」

開始の合図から少しすると建物が凍った。

俺は直ぐさま個性で炎を出し氷を溶かし、建物の氷も溶かした。

「核は任せた」

「え、ちょっ」

俺は核の置いてある部屋から出る。扉に触れ壁と同じ状態にする。意識を集中させながら廊下を歩く。

凍っていく音がしだす。

凍結の個性を使う奴が近いということか

そう思いながら迫ってきた氷を溶かす。さっき溶かした時より溶けが遅い感じを覚える。ある程度歩くと体が氷に覆われた。

炎を出すが氷が溶けない

「⊠」

「やっぱりな、思った通りだった」

声がする方へと顔を向けると左右で目と髪の色が違う少年がいた。

「炎が使えなくなったお前では俺には勝てねえ」

幻術では勝てないのなら〝鬼〟でやるしかない

「獄炎」

鬼の姿になり俺を覆っていた氷を溶かす。

「⊠」

また氷が迫ってくる。

右手を出し炎出す。射程距離は左右の色が違う少年に届くか届かないかぐらいに調節する。左手で温度調節と威力の調節をしながら小さめの炎の球を数個出し少年の近くの壁に向かって投げる。壁に当たり煙が少年の前を遮る。俺は少年の周りを円形状に炎が広がる

ような想像をし、先程の球より大きい炎球を出し投げようとしたすると……

その時俺の思考が飲み込まれた。

鳴呼憎いアイツが憎い

＊＊＊の頭を切り落としたアイツが憎い

＊＊＊の右腕を切り落としたアイツが憎い

鳴呼憎い、憎い、憎い

この煉獄の炎で焼き殺してやる

楽に死なせてなるものか

そして俺は何かどろっとしたものに呑み込まれた。

「…もう3度　だよ!」

「申し訳　ません　ガール」

声が聞こえてきた。

「私に　ど　するの!疲労困　うえ昨日の今日だ。一気に　してやれない」

「応急　はした　点　部入っ　日をまた　少しずつ活性化　いく　ないさね」

「まったく…力を　た愛　だからって甘や　んじゃないよ!」

「返す言葉もありません。彼の気持ちを　やりた　訓練を中断させました」

「してその…あ　な声で　のことを話す　どうかと」

「はいはいナチュラル　ヒーロー様。　象徴様」

何か聞いてはいけないような話になってきた。

寝よう、寝てしまおう

＊＊＊はいつもまとわりついてくる＊＊＊に嫌悪をいだいている様子

あの時何もできなかった俺が憎い

憎い

そして俺と同じ様に＊＊＊＊＊の首を＊＊＊＊＊の右手を切り落とした＊＊＊＊＊が憎い

１０話

「おい、起きろ、おい」
　目を開けると天上が見え声が聞こえたであろう方を見ると無精髭の男がいた。
「大丈夫か？」
　何がだろうか
「？はい？」
　困惑紛れの声で答える。
「さっきまで個性が暴走してたんだ」
「幻術だったから被害はなかったんだけどね」
　暴走…
「右手を見せてもらえるかい？」
　そう老婆に言われ右手を見せる。右手は火傷の痕が手の甲の殆どを覆っていた。
「大分古い痕のようだね」
　その痕は幻術で覆い隠していた火傷の痕のことだった。
「この痕のことを教えてもらえないかい？」
「俺自身への罪で罰でもあり戒めでもあるもの」
　まだ確信が持てているわけではないが夢の内容的にはそうなのではないかと思う
「それでは、ありがとうございました」
　俺は意味を聞かれる前にベットから降り２人にお礼を言い部屋を出る。
　部屋を出てその痕を見る。
　二人の鬼との記憶を思い出す度に痕が広がっている。まだ意図は分からないが
　右手の甲に触れ幻術で隠す。
　窓から外を見ると既に空は夕焼けの状態だった。ふと校門辺りを見ると緑色の髪の少年と薄い金色の髪の少年がいた。薄い金色の髪の少年は何かを緑色の髪の少年に言っていた。俺には悔しそうに見

えた。ヒーロースーツ?を着た筋肉質な男が現れ薄い金色の髪の少年の肩をつかまえた。直ぐに離れた。
何がしたかったのだろうか
三人の少女が見ていた。
教室へと入り自身の席にいく。帰り仕度をする。
「駅まで一緒に帰らないか」
声をかけられた方を見ると、鋭い目つきに赤い瞳の黒い鳥のような顔の風貌をした少年が立っていた。
「嗚呼」
しばらくの沈黙が続く。
「俺の個性 黒影(ダークシャドウ)は闇が深ければ攻撃力が増すが獰猛になり制御が難しくなる。逆に日光下では制御こそ可能だが攻撃力が下がる」
「何故個性の話を」
「戦闘訓練の時に似ていると思ってな。人に聞くより先ずは自分からと思ってな」
「そうか」
「済まない急に、だが無理に言う必要はないぞ」
「俺には二つ個性があるだ。一つは幻術、二つ目は鬼」
「二つも⊠」
「鬼の時には使用時間が決まっていてな。戦闘訓練時に見たとは思うがあいう風になる」
俺自身はどうなってるか知らないが
「幻術は教えられない。知られると実質個性が一つになるからな」
「そうか、教えてくれてありがとう」
駅で別れる。
雄英高校で見た夢をまた見る。部屋に被害はなかった。
雄英高校の門前には報道陣がいる。視認されないように俺に幻術をかけ通り過ぎる。一瞬不穏な気配を感じた。
教室に着くと既に何人か生徒がいた。その中には常闇もいた。
「おはよう」
「おはよう」

あの夢を見ても常闇のことは忘れてはいなかった。

11話

「ホームルームの本題だ。急で悪いが今日は君らに」
なんだ？
「学級委員長を決めてもらう」
俺を除き皆やりたいようだ
「静粛にしたまえ！多を牽引する責任重大な仕事だぞ！やりたい者がやれるものではないだろ。周囲からの信頼あってこそ務まる聖務民主主義にのっとり真のリーダーをみんなで決めるというのならこれは投票で決めるべき議案！」
「腕そびえ立ってるじゃねぇか！」
真面目な少年の発言に誰が言った。
「どうでしょうか？先生」
「時間内に決めりゃなんでもいいよ」
「ありがとうございます！」
寝にかかってるような
結果
「僕3票!?」
緑谷という少年だろうか
「なんでデクに！誰が!?」
「まぁおめぇに入れるよか分かるけどな」
「くっ…0票…。分かってはいた。さすがに聖職といったところか！」
「他に入れたのね」
「お前もやりたがってたのに何がしたいんだ？」
「じゃあ委員長は緑谷副委員長は八百万だ」
委員長が決まった。
教室で昼食をとっていると
《セキュリティー3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください》
廊下に出て外を見ると密度が上がっていた。隙間を抜け外を見る

と報道陣が入っているようだった。
　俺は教室に戻り昼食に戻った。
「ほら委員長始めて」
「で、では他の委員決めをとり行ってまいります！」
「けどその前にいいですか。委員長はやっぱり飯田天哉君がいいと思います」
「あんなふうにかっこよく人をまとめられるんだ。僕は飯田君がやるのが正しいと思うよ」
「俺はそれでもいいぜ。緑谷もそう言ってるし、確かに飯田食堂で超活躍したしな」
「ああ。それになんか非常口の標識みてぇになってたよな」
「時間がもったいない。なんでもいいから早く進めろ」
「委員長の指名ならばしかたあるまい。以後はこの飯田天哉が委員長の責務を全力で果たすことを約束します！」
「任せたぜ非常口！」
「非常口飯田しっかりやれよ！」
「今日のヒーロー基礎学だが俺とオールマイト、そしてもう1人の3人体制で見ることになった」
「何するんですか？」
「災害水難なんでもござれ。レスキュー訓練だ」
ＲＥＳＣＵＥと書かれた紙を出す。
「訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗って行く。以上、準備開始」
「1—Ａ集合！ピッピー！」
　元気だなあ
　バスの中は個性の話で盛り上がっていた。
　訓練場に着く。着くと宇宙服を着た人が立っていた。
「わあ～！私好きなの１３号！」
　誰かが言った。訓練場の中に入る。
「すっげぇ～！ＵＳＪかよ！」
「水難事故、土砂災害、火災、暴風ｅｔｃ

あらゆる事故や災害を想定し僕がつくった演習場です。その名も」
「ウソの災害や事故ルーム！略してＵＳＪ！」
相澤先生と１３号先生が少し話ていた。
「始める前にお小言を１つ２つ３つ４つ５つ６つ…」
増えてるなあ
「皆さんご存じとは思いますが僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」
「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね」
「ええ。しかし簡単に人を殺せる力です」
「みんなの中にもそういう個性がいるでしょう。超人社会は個性の使用を資格制にし厳しく規制することで一見成り立っているようには見えます。しかし一歩間違えば容易に人を殺せる行き過ぎた個性を個々が持っていることを忘れないでください。相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘訓練でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います。君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるためにあるのだと心得て帰ってくださいな。　以上、ご清聴ありがとうございました」
「素敵～！」
「ブラボー！ブラボー！」
「よーしそんじゃまずは」
☒何かが背筋を震わせる。
「一塊になって動くな！１３号、生徒を守れ」
「なんだ？また入試んときみたいなもう始まってんぞパターン？」
「あれは敵（ヴィラン）だ」
相澤先生がゴーグルをかけた。

１２話

「侵入者用センサーは？」
「センサーが反応しねぇなら向こうにそういうことができる個性がいるってことだ。校舎と離れた隔離空間。そこにクラスが入る時間割り、バカだがアホじゃねぇ。これはなんらかの目的があって用意周到に画策された奇襲だ」
「１３号、避難開始。学校に電話試せ」
「電波系の個性が妨害している可能性がある。上鳴お前も個性で連絡試せ」
「一人で戦うんですか!?あの数じゃいくら個性を消すといってもイレイザー・ヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ。正面戦闘は」
「一芸だけじゃヒーローは務まらん。任せた１３号」
　相澤先生ら首に巻いてある布で敵を捕縛し、敵同士をぶつける。突っ込んできた敵を殴り飛ばし足を捉え叩き落とした。
　相澤先生の戦闘を見ていると背中に何かを感じ振り返る。
「はじめまして。我々はヴィラン連合」
　黒い靄のようなものが出てきた。
「僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは平和の象徴オールマイトに息絶えていただきたいと思ってのことでして、本来ならばここにオールマイトがいらっしゃるはず。ですが何か変更があったのでしょうか？」
「まあそれとは関係なく私の役目はこれ」
　敵が言い終わる前に薄い金色の髪の少年と赤色の髪の少年が敵の体に穴を開ける。
「危ない危ない。生徒といえど優秀な金の卵」
「ダメだ！どきなさい二人とも！」
「私の役目はあなたたちを散らしてなぶり殺す！」
　黒い靄にのみ込まれた。

のみ込まれた先には火災が起きていた。辺りを見回すと尻尾の生えた少年と飛ばされたようだった。
神経を研ぎ澄ませる。感知した数を糸で縛る。
「悪い」
羽をだし少年を抱え飛び立つ。
「わっ！」
少年は驚きの声を出す。
飛んだことで感知できていなかった敵を捕縛していく。
「君の個性って」
飛ばされる前にいた場所に近づいていく。少年を降ろすあたりで、目の端で相澤先生が血を流し異様な姿の化け物に頭を捕まえられている様子を捉える。何故か右手が熱いような感覚を覚える。そして怒りの感情が湧き上がってくる感覚に襲われる。少年を降ろすと直ぐに鬼の姿になり飛び出した。そして熱くて堪らなくなった右手で敵の顔を掴み叩き落とした。
「幻魔くん⊠」
少し冷静になったのか声が聞こえた方を見ると緑色の髪の少年と蛙のような見た目の少女、頭に紫色の髪の少年がいた。その近くにいくつかの手が付いている男がいた。その男からも異様な雰囲気を感じた。

13話

地面に叩きつけた敵が起き上がる。まるで攻撃を受けていなかった様に。
「効いていない」
「効かないのは対平和の象徴のショック吸収だからさ」
「成る程」
右手から皮膚が焼ける程度の温度に調節した相手の大きさくらい火の玉を出し、投げつける。
焼けるが直ぐに傷が塞がった。
「再生もあるのか」
鬼の姿は炎を使わなければ使うより使用時間が長いが相手がショック吸収に再生ときた、相手が悪過ぎる
「やれ脳無」
脳無と呼ばれた化け物が向かってくる。右拳で殴ろうとするのを掌で受け止める。視界が下がった様に見えた。
なんて力だ
右手の指達を脳無の体に突き刺し、手首まで押し込む。脳無の体の内から燃やす。俺が呑み込まれないすんでのところで脳無から離れる。脳無の体が激しく燃える。暫くすると炎が収まるが脳無は動かない。
「何で動かないだよ」
鬼の姿を解除する。
これ以上は無理だ呑み込まれる
相澤先生の傷を塞がないと
と思い相澤先生の方を向くが相澤先生はおらず、いくつかの手が付いた男しかいなかった。水の所にいた彼らがいなくなっていた。
連れて行ったのか
「なあ何をしたんだよ」
男に聞かれる。
「脳無だったか、あいつの認識ではまだ体が燃えてるだ。再生しては

燃えを繰り返しているだ」
答えると男が首を掻き毟りだした。苛々している様だ。危険な雰囲気が出ている。足から少しずつ何かどろっとしたものに呑み込まれていく感覚を覚える。
脳無が動きだしてしまう。どうする、どうすれば
もう誰かを失うのは懲り懲りだ
「私が来た」
ヒーローが来たようだ。良かった
目の前が真っ暗になった。

ーー「何だまた呑み込まれたのか」
声が聞こえる
ーー「俺としてはもう身を任せればいいと思うだ」
どいう意味だ
ーー「嗚呼まだ思い出していないだったな」
だからどいう
ーー「取り敢えず思い出せば俺の言っている意味も分かるようになる」
ーー「お、目覚めるみたいだぞ。またな＊＊＊＊」
最後に言った言葉は聞き取れなかった。

目を開けると蛙のような見た目の少女の顔があった。
「目が覚めたのね。よかったわ」
俺が起きようとするのを手伝ってくれる。
「ありがとう」
「いいのよ」
辺りを見回すと始めにいた場所だった。敵がいる場所を見ると筋肉質な男が脳無と闘っていた。
俺は相澤先生に近づき触れる。腕の骨が折れ顔の骨も折れていた。
粉砕かもしれないな

代わりの骨を幻術で作り慎重に糸で骨と骨を繋ぎ合わせていく。
「治せるの？」
「骨同士を繋ぎ合わせてるだけに過ぎないがな」
相澤先生の自身の骨同士がくっつくまでの間だけはいけるように意識を失わないようにしないと
凄い大きい音がする。敵がいる方を向くと筋肉質な男が脳無を吹っ飛ばしていた。直ぐに脳無が立ち上がり殴り合う。脳無に何発も拳を当てる。脳無が天井を突き破り吹き飛んだ。

１４話

敵同士が何か話終わるといくつかの手を付けた男が筋肉質な男に向かっていく。緑髪の少年が飛び出す黒い靄の奴が男の手を少年の前に出し少年に触れそうになるが手を撃ち抜かれた。
「ごめんよみんな。遅くなったね。すぐ動ける者をかき集めてきた」
「１—Ａクラス委員長飯田天哉！ただいま戻りました！」
先生達が敵を一掃する。いくつかの手を付けた男は黒い靄に入り黒い靄と共に消えた。
「両脚重傷の彼を除いてほぼ全員無事か」
刑事が言う。
「そうか。やはり皆のとこもチンピラ同然だったか」
「ガキだとなめられたんだ」
赤色の髪の少年が拳同士を合わせる。
「ドームに穴開けたのやっぱりオールマイトだったのか」
「とんでもねぇパワーだ」
「さすがだな」
「刑事さん。相澤先生は？」
蛙の見た目の少女が刑事に相澤先生の容体を聞く。
〈両腕の骨、顔面の骨の修復がされていて大事ないです。脳系の損傷は見受けられません。眼窩底骨の修復がされていましたが目に何かしらの後遺症が残る可能性があります。後で骨を修復した生徒を連れてきてください。〉
「だそうだ」
「目に後遺症が…」
「１３号先生は？」
「治療は終わってる。背中から上腕にかけての裂傷がひどいが命に別状なし」
「オールマイトも同じく命に別状なし。リカバリーガールの治癒で十分処置可能とのこと」
「緑谷君は!?」

「彼も保健室の治療で間に合うそうだ」
全員の顔が安堵する。
「三茶。私も保健室の方に用がある。後は頼んだぞ」
「了解」
猫なのか
「骨を修復したのは君で合ってるかい幻魔君」
「はい」
「話を聞きたいそうだ」
「分かりました」
制服に着替え向かう。
医者と相澤先生の骨の修復について話をした。帰りは警察に送られるかと思ったが暁月と父になるらしいエクトプラズマさんが迎えに来ていた。
車の中でエクトプラズマさんにもっと早くに助けに来ていればと謝られた。暁月は終始無言だった。
家に帰ると雷電に抱きしめられた。
「無事でよかったー」
苦しいなあと思っていると雷が雷電を俺から離し俺を抱きしめた。
「無事で良かった」
と言い頭を撫でられる。
「母さんはまだ帰って来ていないのか？」
「残業だってさ」
「そうか、直ぐに晩御飯用意するな。…エクトプラズマさんはどうしますか」
「遠慮スルヨ。アンナコトガアッタンダ兄弟水入ラズノ方ガイイダロウ」
と言うと俺の頭を撫で「無事デ良カッタ」と言い家を出た。
「ふぅー」
暁月が肩の力を抜く。
「緊張したー」
車の中で終始無言だったのは緊張していたからしい

暁月はキッチンへと向かった。雷、雷電は俺を部屋へとと連れていくとリビングへと向かった。俺は部屋に入ると制服を脱ぎ部屋着へと着替える。着替え終わった時携帯に通知が来る。見ると常闇からだった。

〈もう家に帰ったか〉

〈嗚呼〉

〈また意識を失ったと聞いたが大丈夫か〉

〈使用時間が過ぎただけだ〉

〈そうか、ではまた明日な〉

〈また明日〉

携帯を閉じる。机から日記を出し今日あったことを書いていく。意識を失った時のことは書かなかった。

何か少し嫌な予感がしたからだろうか

１５話

〈昨日雄英高校ヒーロー科の災害訓練施設で生徒達がヴィランに襲撃を受けた事件の続報です〉
〈警察の調べによると犯人グループは自らをヴィラン連合と名乗り、今年春から雄英高教師に就任したオールマイトの殺害を計画していたことが新たにわかりました〉
〈警察は７２名のヴィランを逮捕しましたが主犯格の行方は依然としてわかっていません〉
　昨日のことがニュースで流れていた。
「ねえねえ！昨日のニュース見た？私全然目立ってなかったね～」
「確かにな」
「あのカッコじゃ目立ちようがないもんね」
「しっかしどのチャンネルも結構でかく扱ってたよな」
「無理ないよ。プロヒーローを輩出するヒーロー科が襲われたんだから」
「あの時先生達が来なかったらどうなってたことか」
「やめろよ瀬呂！考えただけでもちびっちまうだろ！」
「ウッセーぞ！黙れカス！」
　その声で後ろの席の緑髪の少年と紫髪の少年が怯える。
「けどさすがオールマイトだよな。あのクソ強いヴィランを撃退したんだから」
「驚愕に値する強さだ」
「皆！朝のホームルームが始まる！私語を慎んで席に着け！」
「ついてるだろ」
「ついてねえのおめ～だけだ」
　教卓に立つ委員長に言う。委員長は席に座り悔しそうな顔をした。
「今日のホームルーム誰がやるんだろ？」
「そうね。相澤先生はケガで入院中のはずだし…」
　相澤先生は骨がくっつくまでは安静にとのことだった。
「おはよう」

『相澤先生復帰早えええ！』
　相澤先生は包帯が顔や腕に巻かれていた。
「プロすぎる…」
「俺の安否はどうでもいい。何よりまだ戦いは終わってねぇ」
「雄英体育祭が迫ってる」
『クソ学校っぽいの来たあああ!!!』
「待て待て」
「ヴィランに侵入されたばっかなのに体育祭なんかやって大丈夫なんですか？」
「また襲撃されたりしたら…」
「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示すって考えらしい。警備も例年の5倍に強化するそうだ」
「何よりウチの体育祭は最大のチャンス。ヴィランごときで中止していい催しじゃねぇ」
「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ。かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した。今は知っての通り規模も人口も縮小し形骸化した。そして日本において今、かつてのオリンピックに代わるのが雄英体育祭だ！」
　確か暁月がスカウト目的で見てるって言ってたな
「当然名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値も話題性も高くなる。時間は有限。プロに見込まれればその場で将来が拓けるわけだ」
「年に1回、計3回だけのチャンス。ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ。その気があるなら準備は怠るな！」
『はいっ!!』
　昼休みの時間
　皆燃えていた。
「お前は燃えないのか」
　棚に座っている常闇に聞かれる。
「兄から余り目立つなって言われてるからな」
「何故だ？」
「個性の能力状余り知られてはいけないからな」

「大変だな」
「みんなー私頑張るー！」
茶髪の少女が右腕を挙げ言う。
「「おおー」」
近くにいる少年達が言う。
皆燃えているなあ

１６話

帰る時

「今日は一緒に帰らないか」

常闇に聞かれる

「嗚呼、構わない」

帰ろうと扉へ向かうと廊下には他科の生徒で埋め尽くされていた。

「ななな何ごとだぁ!?」

「出れねぇじゃん！何しに来たんだよ！」

「敵情視察だろザコ」

薄い金髪の少年が言う。

「そんなことしたって意味ねぇから。どけモブ共」

「知らない人のこととりあえずモブって言うのやめなよ！」

「噂のＡ組どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだよなぁ。ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい？」

「こういうの見ちゃうと幻滅するなぁ。普通科とか他の科ってヒーロー科落ちたから入ったって奴結構いるんだ」

「知ってた？そんな俺らにも学校側はチャンスを残してくれてる。体育祭のリザルトによっちゃヒーロー科編入も検討してくれるんだって、その逆もまた然りらしいよ」

「敵情視察？少なくとも俺はいくらヒーロー科とはいえ調子に乗ってっと足元ゴッソリ掬っちゃうぞっつー宣戦布告しに来たつもり」

「隣のＢ組のモンだけどよぉ！ヴィランと戦ったっつうから話聞こうと思ったんだがエラく調子づいちゃってんなオイ！」

「おめーのせいでヘイト集まりまくってんじゃねぇか！」

「上にあがりゃ関係ねぇ」

「く…シンプルで男らしいじゃねぇか」

「一理ある」

「確かに」

「言うね」

「いやいや騙されんな無駄に敵を増やしただけだぞ」

皆体育祭に向けて訓練をする。俺は暁月に言われた通りに幻術の正確性と精密性を上げる訓練をする。
当日の朝
「鬼丸」
暁月に呼び止められる。
「何？」
「優勝するなとは言わないが、無闇矢鱈に個性は使うな」
「勿論そのことは分かっている」
「ならいい、忘れるなよ鬼丸。お前はプロヒーローになるんだ。弱点を知られるようなことはするな。いいな」
暁月から念を押される。
「分かっている」
と言い俺は家を出た。
「まあ忘れていても俺も体育祭見に行くから何方でもいいがな」
と暁月が言っている声が聞こえた。
少し怖いなあ
「みんな準備は出来てるか!?もうじき入場だ！」
委員長が言う。
「緑谷」
「轟くん、なに？」
左右の髪と目の色が違う轟が緑谷に声をかける。
「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う」
「えっ…うん」
「けどお前オールマイトに目ぇかけられてるよな。別にそこ詮索するつもりはねぇが…お前には勝つぞ」
「おお～クラス最強が宣戦布告？」
「おいおい急にケンカ腰でどうした!?直前にやめろって」
「仲良しごっこじゃねぇんだ。何だっていいだろ」
「轟くんが何を思って僕に勝つって言ってんのかはわかんないけど…。そりゃ君の方が上だよ」
「実力なんて大半の人に敵わないと思う。客観的に見ても」

「緑谷もそういうネガティブな事言わない方が…」
赤髪の少年が言う。
「でも！みんな…本気でトップを狙ってるんだ。最高のヒーローに。遅れをとるわけにはいかないんだ」
「僕も本気で獲りに行く」
緑谷はいい顔していった。

１７話

入場する。
「ひひひ人がすんごい…」
「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか…これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」
《話題性では遅れを取っちゃいるがこっちも実力派揃いだ！ヒーロー科１年Ｂ組！》
《続いて普通科。Ｃ、Ｄ、Ｅ組！》
《サポート科Ｆ、Ｇ、Ｈも来たぞ！》
《そして経営科Ｉ、Ｊ、Ｋ！雄英１年揃い踏みだ～!!》
参加する全生徒が並んだ。
「選手宣誓！」
「ミッドナイト先生なんちゅう恰好だ」
「さすが１８禁ヒーロー」
「１８禁なのに高校にいてもいいものか」
「いい！」
「選手代表１―Ａ！爆豪勝己！」
呼ばれた爆豪は登り
「センセー。俺が１位になる」
「ふざけんな！」
「このヘドロ野郎！」
「せめて跳ねのいい踏み台になってくれ」
爆豪は親指を下に向けた。
「第一種目はいわゆる予選よ！毎年ここで多くの者がティアドリンク！さて運命の第一種目、今年は障害物競走！」
「計１１クラス全員参加のレースよ！コースはこのスタジアムの外周約４ｋｍ！我が校は自由さが売り文句！」
「コースを守れば何をしたって構わないわ」
少し悪い顔したような
「スタート!!!」

潜る門が狭く人が詰まる。轟が出て前の生徒達の足元を凍らせた。
「甘いわ轟さん！」
「そううまく行かせねぇ！半分野郎！」
ポニーテールの少女と爆豪、赤髪の少年、金髪の少年、常闇、尻尾の生えた少年などＡ組生徒達が轟を追う。凍った地面を滑る。幻術は使わない。偵察に来ていた普通科の生徒を見つける。騎馬状態になっていた。
紫髪の少年が凍った地面の上にある紫色の球の上に飛び乗り轟の上に行くが何かに飛ばされた。
この機械は入試の時の
「入試ん時のＯＰヴィランじゃねぇか！」
「マジか！ヒーロー科あんなんと戦ったの!?」
「どこからお金出てくるのかしら」
障害物となった機械が襲ってくる。轟が凍らせる。
「あいつが止めたぞ！」
「足元のすき間だ通れる！」
「やめとけ。不安定な体勢ん時に凍らしたから」
「倒れるぞ」
轟が言うと同時に倒れてきた。
「誰か下敷きになったぞ！」
「死ぬのかこの体育祭!?」
流石に死なないとは思うが
「死ぬかァ！俺じゃなかったら死んでたぞ！」
赤髪の少年が機械の装甲を突き破り出てきた。
「Ａ組の野郎はホント嫌な奴ばっかりだよなァ！」
「俺じゃなかったら死んでたぞ！」
銀色の少年も同じ言葉を言い機械の装甲を突き破り出てきた。
爆豪が襲ってきたのを避ける。
破壊したり電気系の個性はショートさせたりしていた。
越えた次の障害は穴が開いていて所々に足場がありその間をロープで繋いでいた。

先頭の轟はロープを凍らせその上を滑る。爆豪は爆破で飛ぶ。
俺はロープにぶら下がって進んでいく。
次の障害は何にも無さそうだが
前の生徒が地面を踏むと爆発した。
地雷か
「俺は関係ねえ!」
爆豪はその上を爆破で飛ぶ。
地雷を踏まないように歩いていると、後方で大きな爆発音がした。
すると上を緑谷が飛んでいた。

１８話

爆発の風で飛んだのか
緑谷は先頭の轟、爆豪を抜いた。
緑谷は１位で通過、２位に轟、３位に爆豪となった。
俺は４２位で通過した。
「予選通過は上位４２名！」
「残念ながら落ちちゃった人も安心なさい、まだ見せ場は用意されてるわ！」
「参加者は２人から４人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらうわ」
「基本は普通の騎馬戦と同じルールだけどひとつ違うのが、先ほどの結果に従い各自にポイントが振り当てられること」
組み合わせによって騎馬のポイントが変わるのか
「そして与えられるポイントは下から５ずつ！４２位が５ポイント、４１位が１０ポイントといった具合よ」
俺は５ポイントか
「そして１位に与えられるポイントは」
「１０００万!!」
一位の騎馬はポイントが高いから狙われやすい
「そう、上位の奴ほど狙われちゃう下克上のサバイバルよ！」
「予選通過１位の緑谷出久くん！持ちポイント１０００万！」
皆が緑谷を見る。
「制限時間は１５分。ポイントの合計が騎馬のポイントとなり騎手はそのポイント数が表示されたハチマキを装着、終了までにハチマキを奪い合い保持ポイントを競うのよ。取ったハチマキは首から上に巻くこと。取りまくれば取りまくる程管理が大変になるわよ！」
「そして重要なのはハチマキをとられてもまた騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ！」
「競技中は個性発動アリの残虐ファイト！でもあくまで騎馬戦、悪質な崩し目的での攻撃などは一発退場とします！」

「それじゃこれよりチーム決めの交渉スタートよ！」
何人かは爆豪と組みたいようで爆豪にアピールしていてた。緑谷の騎馬戦での計画らしきが聞こえかけたのでその場所離れ常闇の近くに移動する。
「お前は誰と組むつもりなんだ？」
常闇に聞かれる。
「決めかねてる」
「俺と組まないか？」
「嗚呼かまわ…いや悪い別の人と組んでくれ」
「どうかしたのか？」
「俺より別の人と組んだ方がいい」
「そうか…」
「誘ってくれたのに悪い」
「いや、気にしないでくれ。当たった時は容赦はいないからな」
「嗚呼」
常闇から離れる。
悪いことしたなあ
「なああんた」
「何だ」
目の前が暗くなる。
ーー「よう、思っていたより早いな」
何がだ
ーー「此処に来るのがさ」
ーー「まあいいさ、お前今面白い状況だな」
どいう意味だ
ーー「あー、言わない方が面白いからいわねえ」
知らずに笑われるのは嫌なんだが
ーー「もうすぐ目覚める好機、チャンス？だぜ」
何で言い直したんだ？
ーー「言ってみたかったからさ。また来いよ＊＊＊＊」
また最後に言った言葉が聞き取れなかった。

１９話

誰かと接触してしまったようだ。
《タイムアップ!!第二種目・騎馬戦終了！》
《１位轟チーム！》
《２位爆豪チーム！》
《３位鉄て…心操チーム!?いつの間に逆転してたんだよ！》
《４位緑谷チーム！以上の４組が最終種目へ進出だァ!!》
《それじゃ１時間ほど昼休憩はさんでから午後の部だぜ！イレイザーヘッド飯行こうぜ》
《寝る》
「幻魔、第二種目突破おめでとう」
常闇が近づいてきた。
「ありがとう、常闇の方こそ突破おめでとう」
「ありがとう、幻魔は昼はどうするんだ？良ければ一緒にどうだ？」
「そうだな、そうしよう」
常闇と共に食堂へと向かう。
《さぁ昼休憩も終わっていよいよ最終種目発表！とその前に予選落ちのみんなに朗報だ！》
《あくまで体育祭、ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ！》
《本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ…ん？》
《どうしたＡ組!?どんなサービスだそりゃ！》
電気使いの少年と紫髪の少年の嘘か
《みんな楽しく競えよレクリエーション！それが終われば最終種目進出４チーム総勢１６名からなるトーナメント形式！》
《１対１のガチバトルだ～!!》
「それじゃ組み合わせ決めのくじ引きしちゃうよ！組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります」
「レクに関しては進出者１６人は参加するもしないも個人の判断に任せるわ。んじゃ１位のチームから」

「すいません。俺辞退します」
　尻尾の生えた少年が言う。
「尾白くん何で!?」
「せっかくプロに見てもらえる場なのに！」
「騎馬戦の記憶、終盤ギリギリまでほぼボンヤリとしかないんだ。多分奴の個性で」
「チャンスの場だってのはわかってる。それをふいにするなんて愚かなことだってのも」
「でもさ、皆が力を出し合って争ってきた場なんだ。こんな…わけわかんないままそこに並ぶなんて俺には出来ない」
「気にしすぎだよ！本戦でちゃんと成果を出せばいいんだよ！」
「そんなん言ったら私だって全然だよ？」
「違うんだ…俺のプライドの話さ…俺が嫌なんだ」
「あと何で君らチアの格好してるんだ」
　それは言ってやるな
　一緒の騎馬だったB組の少年も尾白と同じ理由で辞退したいと言う。
「そういう青臭い話は好み！庄田・尾白の棄権を認めます！」
　好みで決めていいのか？
「となると2名の繰り上がり出場者は騎馬戦5位の拳藤チームからになるけど」
「そういう話で来るなら騎馬戦でほぼ動けなかった私らよりアレだよな」
「最後まで頑張って上位キープしてた鉄哲チームじゃね？」
「お…おめぇらァ！」
「というわけで鉄哲と塩崎が繰り上がって16名！抽選の結果組はこうなりました！」
　俺は芦戸とか
《それじゃあトーナメントはひとまず置いといて楽しく遊ぶぞレクリエーション！》
《まずは借り物競走だ！》

紫色の髪で髪型がツンツンとした見た目の心操を見つける。
「なあ」
俺は心操に声をかける。
「何だ」
心操が応える。
「聞きたいことがある、少しいいか」
「…ああ」
控え室に入る。

２０話

控え室に入り向かい合って座る。
「俺に何をした」
「洗脳」
「洗脳？」
「俺の個性だ。俺の呼びかけに応えた相手を洗脳することができるんだ」
「成る程対人には強力な個性だな」
「敵（ヴィラン）向きだしな」
卑屈的言う。
「それは俺にも言えることだな」
「それは」
「そろそろだろ。対戦相手のことを考える時間に話して悪かったな」
俺はそう言うと控え室を出てＡ組の観客席へと向かった。
「隣空いてるぞ」
常闇に言われ隣に座る。
《第１回戦！成績の割には何だその顔！ヒーロー科・緑谷出久！》
《ＶＳごめんまだ目立つ活躍なし！普通科・心操人使！》
《ルールは簡単！相手を場外に落とすか行動不能にする！あとは「まいった」とか言わせても勝ちのガチンコだ！》
《ケガ上等！だがもちろん命に関わるようなのはアウト！ヒーローはヴィランを捕まえるために拳を振るうのだ！》
《レディイイ！スタート!!》
緑谷が心操に何か言った。
「ああっ！せっかく忠告したってのに！」
《オイオイどうした!?大事な初戦だ盛り上げてくれよ!?》
《緑谷開始早々完全停止!?》
心操に何かを言われたのか、挑発か
挑発なら反応してしまう奴は知っていてもするからな
《普通科心操人使、ヒーロー科緑谷出久を攻略！こりゃまさかの事態

だ成るか下克上!?》
緑谷が場外へと歩いていく。
場外に出そうなると同時に破裂音がした。
線の既のところで緑谷が止まったようだった。
《こっこれは…緑谷とどまったァ!!》
会場が湧く。
心操が緑谷に何か叫ぶ。緑谷は口に手を当てている。緑谷が心操に摑みかかるのを心操が壊れた指を殴り逆に心操が緑谷を摑みかかろうとする。緑谷はその腕を掴む、その時指の痛みに声を上げたが心操を背負い投げた。
「心操くん場外!緑谷くん2回戦進出!」
緑谷が戻ってきた。
《続きましてはこいつらだ!》
《優秀!優秀なのに拭いきれないその地味さは何だヒーロー科瀬呂範太!》
《VS予選2位1位と強すぎるよキミ!推薦入学者の実力は伊達じゃないってか!?同じくヒーロー科轟焦凍!》
《それでは最終種目第2試合レディスタート!》
開始とほぼ同じに瀬呂が腕からテープを出し轟に巻きつける。
《場外狙いの不意打ち〜!この選択は最善じゃないか!?》
轟が瀬呂を凍らせる。ミッドナイト先生が半分凍っている。
規模が凄過ぎる
規模が会場の外に出ているのではと思うほど大きな氷だった。
「ど…ドンマイ…」
「ドーンマーイ」
『ドーンマーイ』
ドンマイコールが会場に広がった。

21話

《B組からの刺客！綺麗なアレにはトゲがある!?ヒーロー科塩崎茨！》

《VSスパーキングキリングボーイ！ヒーロー科上鳴電気！》

《さあさあ今回もド派手なバトルを…》

「あの…申し立て失礼いたします」

「わたくしはただ勝利を目指してここまで来ただけであり試合相手を殺めるために来たわけではありません」

《ご、ごめん》

「そもそもわたくしが雄英校の進学を希望したのは決して邪な考えではなく多くの人々を救済したいと思ったからであり」

《だからごめんってば！俺が悪かったから！》

《とにかくスタート！》

上鳴が個性を発動させると同時に塩崎の髪の毛が伸び上鳴を捕らえた。

《瞬殺！あえてもう一度言おう！瞬殺!!》

「あれあれ～!?A組はB組より優秀なハズなのにおっかしいな～ハハハハウッ」

「ごめんな」

今の何だったんだ？

ブツブツと言う声が聞こえるくる。ブツブツと言っていたのは緑谷だった。茶色の髪の少女に声をかけられ止まる。

《さあ第4試合だ！ザ・中堅って感じ!?ヒーロー科飯田天哉！》

《VSサポートアイテムでフル装備！サポート科発目明！》

飯田もサポートアイテムを着けていた。

「ヒーロー科の人間は原則そういうの禁止よ。ないと支障をきたす場合は事前に申請を」

「忘れておりました！青山くんもベルトを装着していたので良いものと」

「彼は申請しています」
「申し訳ありません！」
「だがしかし！彼女のスポーツマンシップに心打たれたのです！彼女はサポート科でありながらここまで来た以上対等だと対等に戦いたいと俺にアイテムを渡してきたのです！」
「この気概を俺は！無下に扱ってはならぬと思ったのです！」
「青くっさ！許可します」
《まあ許可が出たってことで第４試合スタート！》
　飯田が発目に向かって走る。
《素晴らしい加速じゃないですか！飯田くん！飯田くん、飯田くん》
《普段より足が軽く上がりませんか？それもそのハズ！そのレッグパーツが着用者の動きをフォローしているのです！》
《そして私は油圧式アタッチメントバーで回避もラクラク！》
　発目はサポートアイテムを使って回避する。
《全方位センサーを装備しているので背後からの攻撃にも対応可能です！》
《飯田くんあざやかな方向転換！私が作ったオートバランサーあってこその動きです！》
《タイムラグの心配はまったくありません！オートバランサーは３２軸のジャイロセンサーを搭載！着用者の意図しない転倒を確実に防いでくれます！》
《どうですかこの軽やかさ！》
《エレクトロシューズは左右の靴を電磁誘導で反発させ瞬間的な回避行動を可能にしています！》
《対ヴィラン用の捕縛銃です。捕縛用ネットはカートリッジ式でなんと５発まで発射可能！》
　飯田が捕らえられる。
《それらのアイテムを開発したのはこの私発目明です！サポート会社の皆さん、発目明！発目明をどうかどうかよろしくお願いします！》
　約１０分後
「発目さん場外。飯田くん２回戦進出！」

飯田が怒っていた。
騙されたんだな
次は俺か、どうしたものか

２２話

《立て続けに行くぜ第５試合！個性を使わずに突破！ヒーロー科幻魔鬼丸！》
《ＶＳあのツノからなんか出んの？ヒーロー科芦戸三奈！》
「幻魔相手でも負けないよ！」
第三種目まで進んでしまったなあ
《レディーファイト！》
開始の合図と同時に芦戸の先制攻撃。その攻撃を右に避ける。舞台が少し溶ける。
酸か
また芦戸の酸が飛んでくるのを避ける。怪しまれないように速くない程度の炎の玉を芦戸に向かって飛ばす。
「幻魔君場外！芦戸さん２回戦進出！」
ミッドナイト先生に言われ試合は終わり退場しようと舞台を降りると冷や汗が背をつたうような視線を感じ、心臓の鼓動が速くなっているように感じた。
暁月の視線…
少し下を向き観客席に戻るため壁を伝いながら廊下を歩いていると誰かとぶつかる。顔をあげると心操がいた。
「わるい…」
「大丈夫か、顔が真っ青だぞ」
心操に指摘されあまり体調が良くないことに気づいた。
「保健室に行かなくていいのか？」
「嗚呼、大丈夫だ。観客席で座っているだけで治る」
そう言い俺は心操の横を通り過ぎようしたが心操に腕を取られ心操の肩にまわされる。
え、
「そんな状態をほっとく訳にはいかなからな」
「すまないな」
Ａ組の観客席の近くに着き心操と別れる。

既に常闇が八百万に攻撃を仕掛けていた。八百万は防戦一方であった。
常闇の攻撃が止まり八百万が武器を出したその時
「八百万さん場外！2回戦進出常闇くん！」
ミッドナイト先生が言った。
《まさに圧勝！常闇のダークシャドウこれって最強の個性なんじゃねぇの!?》
八百万が悔しそうな顔をしていた。
「常闇くんすごすぎる。八百万さんの作った盾だけに攻撃を集中させて場外まで押し出すなんて…」
「八百万の体を気遣った？」
「それだけ余裕があるってことか。悔しいだろうな」
《第7試合は個性ダダ被り対決！男気一筋ド根性鋼鉄！ヒーロー科鉄哲徹鐵！》
《VS男気一筋ド根性硬化！ヒーロー科切島鋭児郎！》
《暑苦しい第7試合スタート！》
2人とも走り出し拳同士がぶつかる。切島の右拳が鉄哲を殴り鉄哲が少し後ろに下がるが、鉄哲の右拳が切島を殴る。切島もまた下がるが直ぐに反撃をする。
鉄哲が防御しようとした腕のしたから殴る。鉄哲もまた切島の防御した腕を避けて切島を殴る。
2人は只々殴り合う。
何方の拳も同時に2人を殴り2人は倒れる。
《個性ダダ被り組！鉄哲VS切島！真っ向勝負の殴り合い！制したのは…》
「両者ダウン！引き分け！引き分けの場合は回復後簡単な勝負、腕相撲等で勝敗を決めてもらいます！」
2人は担架で運ばれる。

２３話

《鉄哲と切島が回復してる間に次の試合を始めるぜ！》
《第１回戦最後の第８試合！中学からちょっとした有名人！堅気の顔じゃねぇ！ヒーロー科爆豪勝己！》
《ＶＳ俺こっち応援したい。ヒーロー科麗日お茶子！》
「緑谷くん。先ほど麗日くんに言おうとした爆豪くん対策とは何だったんだい？」
「かっちゃんは強い。本気の近接戦闘はほとんど隙なしで動けば動くほど汗をかいて爆破の個性が強力になっていく。爆破を利用して空中移動もできるけど触れて浮かせちゃえば主導権を握れる。だから最初に麗日さんが選択するとしたら…」
《第８試合スタート！》
「速攻！」
　開始と同時に低姿勢で麗日が爆豪に突っ込む。
「爆豪くん的には麗日くんに間合いを詰められたくないはず」
「だからかっちゃん的には回避じゃなくて迎撃！」
　右の大振りで爆破を起こす。
　何かが見えたのかもう一度爆破を起こした。爆豪の背後に麗日が現れる。中に着ている服だけの状態になっていた。
　上の服を囮に使ったのか
　しかし爆豪は反応し爆破を起こす。麗日が飛ぶ。麗日が立ち上がり煙幕が晴れてまた低姿勢で突っ込むが爆豪の爆破を受けてしまう。
　飛ばされても麗日は爆豪にくらいつく。
《麗日休むことなく突撃を続けるが…これは…》
　また爆豪の爆破を受けてしまう。
　うん？あれは…
「おいそれでもヒーロー志望かよ！そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよ！」
「女の子いたぶって遊んでんじゃねぇ！」
　観客席のプロヒーローからそんな声が聞こえてくる。

気づいてないのか？
《一部からブーイングが。しかし正直俺もそう思》
《肘ッ!?何すん!?》
相澤先生が肘でプレゼントマイク先生を殴ったようだ。
《今遊んでるっつったのプロか？何年目だ？》
《シラフで言ってんならもう見る意味ねえから帰れ！帰って転職サイトでも見てろ！》
《爆豪はここまで上がってきた相手の力を認めてるから警戒してんだろう。本気で勝とうとしてるからこそ手加減も油断もできねえんだろうが》
低姿勢で突っ込むことで爆豪の打点を下に集中させ続け個性を使って武器を上に蓄え、そして絶え間ない突進と爆煙で相手の視野を狭めるか
麗日が両指を合わる。個性が解除され上にあった瓦礫が落ちて来る。
《流星群!?》
《気づけよ》
爆豪は手を上に向ける。
何をする気だ
麗日は突っ込もうとするが爆豪が上に向かって放った爆破により後ろに飛ばされてしまう。
《爆豪会心の爆撃！麗日の秘策を堂々正面突破ー！》
爆豪と麗日が向かい合い突っ込もうとしたが
《麗日ダウーン!!》
そこで倒れるが這いずって前に進もうとする。
ミッドナイト先生が乗っていた台から降りて麗日に触る。
「麗日さん行動不能。２回戦進出爆豪くん！」
《１回戦第８試合…あぁ麗日…うん爆豪１回戦突破》
《ちゃんとやれよやるなら》
《１回戦第７試合で引き分けだった切島と鉄哲のォ！２回戦進出をかけた腕相撲の結果はー!?》

互角だったが鉄哲の一瞬隙が生まれ切島が鉄哲の手を叩きつけた。
「っしゃ～!!」
《キップを勝ち取ったのは切島だあああ!》
悔しそうにしている鉄哲に切島は手を差し出し握手した。
《さあこれで2回戦の進出者が出揃った!つうわけでそろそろ始めようかァ!》
「2人まだ始まっとらん?」
「うら…らぁ!?」
☒
「見ねば」
「目をつぶされたのか!?早くリカバリーガールの元へ!」
目が真っ赤に腫れていた。
泣いただろうな、悔しくないわけないだろうからな
「行ったよ。コレはアレ、違う」
「違うのか!」
「それはそうとさっきは悔しかったな…」
「今は悔恨よりこの戦いを己の糧とすべきだ」
「うん」
「タシカニ」

２４話

《今回の体育祭両者トップクラスの成績！みぃどぉりぃやぁ！ＶＳとぉどぉろぉきぃ！》
《まさしく両雄並び立ち…今！》
《スタァートッ！》
　開始の合図と同時に氷結が緑谷に迫る。破裂音がすると氷が粉々に砕けた。
《おぉ～！緑谷轟の攻撃を破ったァ！》
　また同じように氷結が迫るが砕け、３回目も同じ攻防になる。
「ゲッ！始まってんじゃん」
　先ほど試合を終えた切島が観客席戻ってきた。
「切島２回戦進出やったな！」
「おうよ次おめ～とだ爆豪！よろしく！」
「ぶっ殺す」
「ハハッやってみな！とか言っておめ～も轟も強烈な範囲攻撃ポンポン出してくるからな～バーッつって」
「しかもタイムラグなしでな」
「ポンポンじゃね～よナメんな。筋肉酷使すりゃ筋繊維が切れるし走り続けりゃ息切れる」
　轟と緑谷は４回目の攻防が起こる。
《轟、緑谷のパワーに怯むことなく近接！》
　緑谷は右指が使えなくなり左指で応戦する。
　地面からの氷結により緑谷の足が捕まる。緑谷は左腕で氷を壊し、轟は風圧に飛ぶが自分の後ろに氷結を発生させることで威力を殺した。
　轟をよくみると震えている。
　使いすぎるとああなるのか
「その両手じゃもう戦いにならねぇだろ。終わりにしよう」
《あ～ッ！圧倒的に攻め続けた轟！とどめの氷結を！》
　轟は止めとばかりに氷を発生させたが緑谷が折れた指でもう一度

吹き飛ばされ氷で勢いを止め場外を免れた。
「てめぇ…壊れた指で！何でそこまで…」
「震えてるよ轟くん。個性だって身体機能のひとつだ。君自身冷気に耐えられる限度があるんだろう？それって左側の熱を使えば解決出来るもんなんじゃないのか？」
「みんな本気でやってる。勝って目標に近付くために…1番になるために半分の力で勝つ!?まだ僕は君に傷ひとつつけられちゃいないぞ！」
　緑谷は握り込んだ。
「全力でかかってこい!!」
「全力？クソ親父に金でも握らされたか？イラつくな！」
　轟が緑谷に突っ込むがどこかフラフラしているように見えるな
　緑谷が轟の右足が上がったタイミングで個性を発動させ、
『しない！』
《モロだァ～！生々しいの入ったァ!!》
　緑谷は痛みに顔を上げる。轟が反撃に氷結を発生させ緑谷は回避がギリ遅れ左腕が凍った。
　轟が緑谷との距離を縮めるが緑谷の個性の衝撃に離される。
　親指を使おうとするが握れなかったため頬を使い吹き飛ばす。
「笑って応えられるようなカッコイイヒーローになりたいんだ!!」
「だから！全力で！やってんだみんな！君の境遇も君の決心も僕なんかに計り知れるもんじゃない。でも全力も出さないで一番になって完全否定なんてフザけるなって今は思ってる！」
　距離を縮めた緑谷の拳が腹に入る。
「だから僕が勝つ！君を超えて!!」
　轟が膝をつき立とうとする。
「親父の…力を…」
「君の！力じゃないか!!」
　その言葉を言った後炎が発生する。
「勝ちてえくせに…ちくしょう…敵に塩を送るなんてどっちがフザけてるって話だ…俺だってなりてよ…ヒーローに…！」

２人とも笑ってるな
「焦凍ォォォオオオオ!!」
《ん？》
「やっと己を受け入れたか！そうだ！ここからがお前の始まり！俺の血をもって俺を超えて行き俺の野望をお前が果たせ!!」
《エンデヴァーさん急に激励…か？親バカなのね》
どちらも最後の攻撃に態勢に入る。轟は氷、炎のどちらも発動させる。
止めるためセメントス先生は個性を発動させ、ミッドナイト先生は腕あたりを破く。
緑谷はなるべく近くで発動させるつもりらしく轟との距離を縮め、２人の間に４枚ほどの壁出来たが２人は攻撃した。
ぶつかり合った衝撃は凄まじく客席の屋根が壊れた。
《…お前のクラス何なの？》
《散々冷やされた空気が瞬間的に熱され膨張したんだ》
《それでこの爆風ってどんだけ高熱だよ！ったく何も見えねぇ！オイこれ勝負はどうなってんだ!?》
煙が晴れてくる。
「み…緑谷くん場外」
「轟くん３回戦進出！」
緑谷は場外で負けとなり轟が３回戦へと進んだ。